

1 条件設定に当たって

個人に対して集団の有益性は、自分のみならず多方面からのさまざまな情報や考え（以下考え）を得ることができることである。集団は、課題解決し結論づけるには、一つにしぼりにくく不確かであるが、多くの解決に関連する事実や深まりを持っている。すなわち集団では、自分の考えと比較し、対決し得る他者のさまざまな考えにふれることができる。そして自分の考えは、集団から得られた考えと比較検討することにより、裏付けられ、または改善され、深まりを持った課題解決につながるであろう。また、比較検討する場においては、自分の考えを伝えたい、他の考えも聞きたいという思いも高まり、思考力、判断力、表現力を発揮する場となるであろう。

本研究主題におけるコミュニケーションとは、さまざまな考えにふれ、自分の考えを比較検討できる集団のよさを生かしながら、一人一人がより深い課題解決につなげることができる話し合い活動（以下集団思考活動）をとらえる。このような集団思考活動は課題によっては少人数や学級全体などさまざまな形態が考えられる。その課題に応じた形態をとることにより効果もあがることであろう。この集団思考活動がどの場合にも効果的に成立する条件を以下の三点とした。

- ・条件A 活動にはいる十分なレディネス
- ・条件B 自他の考えの立場が明確
- ・条件C 共感的に比べながら 聞く 話す

2 条件について

・条件A 活動にはいる十分なレディネス

本時以前からの条件と本時での条件とに分けられる。本時以前からの条件とは、その集団が他を認められる共感的関係を構築していること（以下条件A(1)）である。この関係が基盤にないことには、他の意見を受け入れられなくなり、一方的な意見表明に終始してしまい、ややもすると意見表明さえできない雰囲気がかもしたすだろう。どのような形態の集団思考活動でも道徳的かつ円滑に進められるためには欠かせない。また、本時での条件は、課題に対する明確な自分の考えをもつこと（以下条件A(2)）である。自分の考えを深めたい、他の考えを聞きたいという思いは、比較対象となる自分の考えがあってこそ強くなる。

・条件B 自他の考えの立場が明確

自分の立場はどこに属しているのか、同じような考えをもっているのはだれなのか、違う考えをもっているのはだれなのかを明確にすることにより、他者を意識することになる。他者を意識することは、他の考えがあることを認識することになり、他の考えに対しての関心が高まり、自分の考えと比較、検討したいという意欲が高まる。

・条件C 共感的 懷疑的に聞く 話す

どのような考えでも、他者の考えを共感的に比べながら聞くことは、自分の考えの立場を意識しながら聞くことになり、自分の考えと他の考えを比較検討しやすくなる。また共感的に比べながら話すことは自分の立場を意識しながら話すことになり、聞き手も自分の考えと比較検討しやすくなる。このサイクルで比較検討のできる集団思考の場になる。

以上、これらの条件は、それぞれが独立しているものではなく相互関係にあり互いに影響し合っている。条件A(1)のもと条件A(2)、条件Bを経て条件Cがあることで、この集団思考活動は成立する。

3 おもな実践

基盤となる条件A(1)の共感的関係を構築しながら、条件A(2)、条件B、条件Cを含んだ集団思考活動を実践していく。この条件をつかって主体的に集団思考活動を行える見通しが、子どもにもつくようにしたい。そのためにも、教科を問わず道徳や特別活動などさまざまな場で実践した。

・条件A(1) 他を認められる共感的関係の構築

他を受け入れる共感的な関係が基盤にないことには、本テーマに近づくことはできないということは先にも述べた。しかしながら、この関係を構築するには、一朝一夕ではできない。四月に新しいクラスに編成され、新しい学級を作っていこうという関心が高いころから計画的に実践を行った。各教科、総合的な学習の時間、道徳、特別活動を通して意識付けしてきた（資料1）。

(1) 4月の実践

新しいクラスで構成的グループエンカウンターを利用し、リレーションづくりを中心に取り組んできた。また、一人一人をお互いに認め合い大切にしていきたいという願いから国語科では「わたしと小鳥とすずと（金子みすず）」の詩を学習した。一人一人が大切、みんなちがってみんないいという気持ちをわかちあった。A児は、「人はそれぞれちがってあたりまえだ。わたしにも必ずいいところがある。みんなちがうからおもしろい。」という感想をもつことができた。この思いは共感的人間関係を築くうえで大切な思いであると考え、教室内に掲示していつでも確認できるようにした（資料2）。

道徳の時間に、「教室はまちがうところだ（まきたしんじ）」を読み合った。発表に対する自信と集団学習への楽しみをもてるようになった。「ぼくは、まちがっていいのかと思ってすごく安心しました。何回でも失敗していい教室をみんなで作ってみたいです。」というB児の思いをみんなで共有することができた。本テーマには、この思いをみんながもち実践にうつせることが大切と考えて、「発言カード」を利用し定着をはかった。挙手による発言ができれば1コマぬる。1枚に30コマあるカードである。発言のがんばりが目にみえることと「教室はまちがうところだ」で学んだことが後押しになってか、子どもたちは次々と発表をつづけ、発言意欲が確かなものとなってきた。今までほとんど発言をしなかった子も発言をするようになってきたため、互いに多くの子の思いを知ることができ、共感的関係づくりへの足がかりにもなった。

	各教科	総合	道徳	学級活動	行事等
四月	・国語科 「わたしと小鳥とすずと」		・教室はまちがうところだ エンカウンター①（リレーション）	・発表カード	・遠足
五月	・社会科グループ活動 ・理科グループ活動	・つながりの中で生きる私（概観）	・エンカウンター②（友達の輪を広める） ・信頼友情	・週毎席がえ班がえ	・ふじだなおとぎ会 ・運動会
六月	・理科グループ活動 ・体育科グループ活動	・学年総合	・エンカウンター③（凝集性） ・思いやり親切	・主体的な学級会	
七月	・学年英語	・ふりかえり			

資料1 共感的人間関係を築く実践表
構成的グループエンカウンターは、道徳・学級活動・総合的な学習の時間・各教科で実施（月2回）



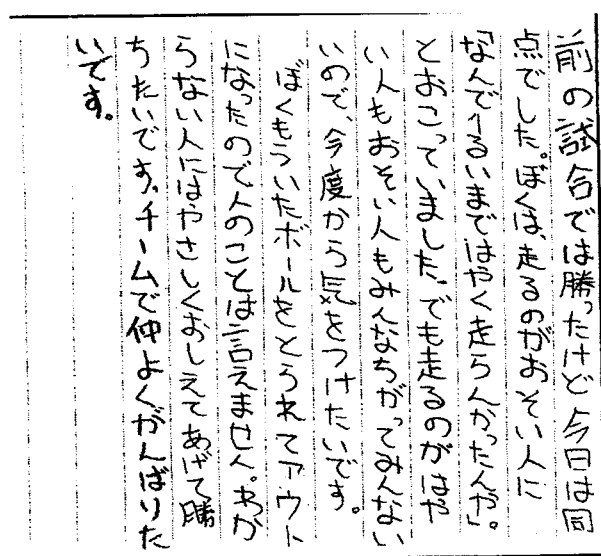
資料2 共感的人間関係を築く教室掲示

(2) 5月の実践

友人関係の輪を広げることを意識し、より多くの子と交わるようにした。道徳や学級活動等で行う構成的グループエンカウンターでは、他者理解エクササイズを中心に行った（何でもバスケット、猛獣がりへ行こうよ、サッカーじゃんけん等）。子どもたちは楽しみながら多くの子と交わる体験ができた。教科ではグループ活動を多くとり入れた。グループは教科毎、単元毎に変わるようにした。学級の座席や生活班も1週間毎に変えることを始め、より多くの子ども同士がかかわりを持てるようにした。この月には、「ふじだなおとぎ会」や「運動会」という大きな行事があった。グループ練習や休み時間の自主練習などでがんばり、成功させていくごとに、みんなでがんばり成功させる喜びを共通体験できた。「みんなががんばっていたのでぼくもがんばりました。みんなががんばって成功させました。みんなががんばることは大切だ」（C児）という集団を意識する感想をもてるようになってきた。

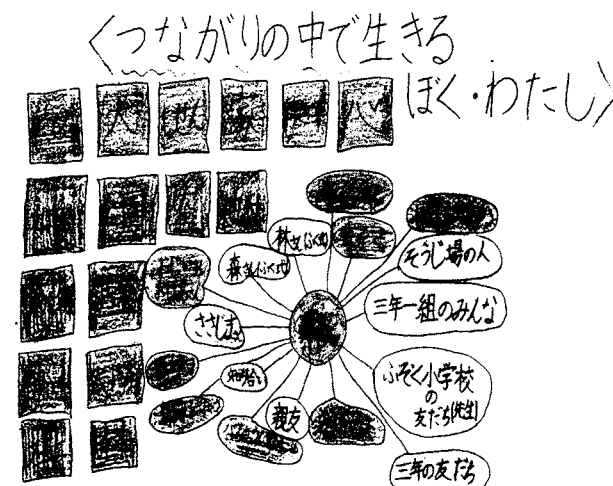
(3) 6、7月の実践

多くの子と交わる実践を重ねてきたので、次は一人一人のつながりをより強くし凝集性を高めるための実践をした。グループ活動や学級会では集団での主体的な活動を多くした。



資料3 キックベースのことを書いた作文

お互いを認め合う気持ちが表れている



資料4 総合的学習の時間の概観図

自分を取りまくさまざまなものが書かれている

体育科のキックベースボールではグループでの自主的な活動を中心にした。はじめてキックベースをする子も多く、最初はグループ内でルールを教え合ったり、ボールキャッチの練習をしたりしていた。次第に、ゲーム形式で練習する姿や、頭をよせあって作戦を考える姿が見られるようになった。最後には、3の1クラスリーグを行った。初めは勝敗にこだわって友達同士でトラブルになることもあったが、お互いを認め合う気持ちがうまれ（資料3）、勝利に向かって団結するようになった。

学級会活動では、図書室の使い方が悪く、本の貸し出しが禁止になった。今までの反省をもとに、何度も主体的に学級会をもち、クラスのルールづくりや本の扱い方について話し合った。みんなで決めたことをみんなで伝えに行き、再び図書室の利用許可が出たときには、みんなで喜び合った。そのときの気持ちを、子どもは、「みんなの心がつながってまわってやっとなんかになった。やっとなんかの協力が力をだした。わたしはあのとき感動した。」（D児）、「図書室が使えるようになったことよりも、みんなでずっと相談して協力してきたことのほうがぼくはとってもとってもいいと思いました。」（E児）と綴っていた。みんなで協力してのりこえた喜びをわちあえた。

総合的な学習の時間では「つながりの中で生きる私」をテーマに、人、社会、自然などさまざまなもののつながりのなかで生きている自分を発見することをめざしている。最初は自分たちを取りまくさまざまなものを概観した（資料3）。その後、学級や学年の友達とのつながりをもっていること、友達の中で生きる喜びを感じることを、具体的共通体験をもとに見つめなおす活動をしてきた。一学期の「つな

がりの中で生きる私」の振り返りでは、多くの子はみんなと協力して成功できた喜び、協力して乗り越えられた喜びを書いていた。「運動会、ふじだな、キックベース、そうじ・・・どれもぼくはみんなと協力しあってつながって生きている。いろいろなグループづくりも男女関係なくやると感じがよくて気持ちよくなります。ぼくはひとりではほとんどできません。だからみんなとつながれるのはすごく大事なことだと思います。」(F児)と書いているように、だれをも認めていっしょに活動する喜びを感じている子が多かった。この総合的学習の時間が、共感的人間関係を築くためのさまざまな取り組みを振り返り、確実なものにする役割を果たしていた。

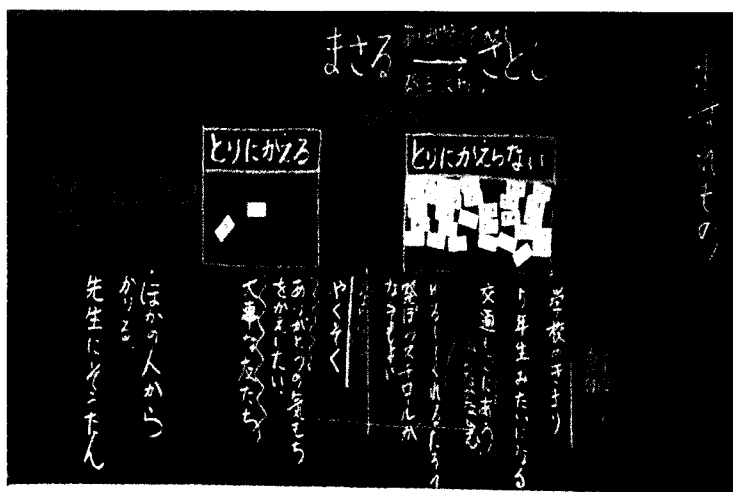
以上の実践によって、協力する喜びを感じることができるようになったことから、共感的関係は、高まりをみせていることがわかる。共感的関係作りの段階を設定し、各教科、特別活動などすべての活動において意識して実践してきたことが効果的であったのだろう。共感的な関係(条件A(1))を構築していくにつれ、学級でのグループ活動や話し合い活動に人間関係が障害になることが少なくなった。集団思考活動が少しずつ道徳的かつ円滑に、進められるようになってきたのである。

- ・条件A(2) 明確な自分の考えをもつ
 - ・条件B 自他の考えの立場が明確
 - ・条件C 共感的に比べながら 聞く 話す
- (条件A(2) 条件B 条件Cがそろった授業実践)

条件A(2)、条件B、条件Cは単独で機能するものでなく相互関連するものであるため、この条件がそろった授業実践を重ねた。課題に対する最初の自分の考えを書く(条件A(2))。板書にネームプレートをはり自分の考えの立場や他の考えがあることを知る(条件B)。出された意見を類別し番号をつける。人に対する意見ではなく意見に対する意見を言うという意識をもたせる。これらによって、一つ一つの意見が明確化し、自分の考えと比べやすくなり、賛成または反対の意見をもちやすくなる(条件C)。条件に対してこのような手だてをとり、さまざまな場面で繰り返すことにより、子どもにも集団思考活動をとおして課題解決をしていく流れの見通しをもてるようにした。

道徳の授業では「ロンとわかれたくない」「なくしたかぎ」「わすれもの」「手作りケーキ」のモラルジレンマ資料を通して実践を行った。モラルジレンマ資料では、条件A(2)は、資料のジレンマに対する第1次判断(最初の考え)とした。条件Bは、その考えを黒板にネームプレートをはり、視覚的にもわかるようにした。条件Cは、出された理由づけに番号を打ち類型化し、どの考えに対して自分の考えを述べるのかわかりやすくした。またそれは賛成なのか反対なのか明言してから発言させた。

「わすれもの」の実践では、主人公がわすれものを取りに帰るか帰らないかの第1次判断が条件A(2)である。迷ってもとにかく自分の考えをもつことが大切であると強調した。教室はまちがうところだ(条件A(1))の定着もあってか全員がノートに考えを書くことができた。また、初めの考えをより明確にするため、取りに帰る、取りに帰らないの結論を書いてからその理由を書かせた。そうすることで自分の考えが他の考えと比べやすくなり、この後の条件Cの効果をあげることもなった。第1次判断(条件A(2))を全員が書き終わったら、帰る、帰らないにわけて黒板にネームプレートをはり、



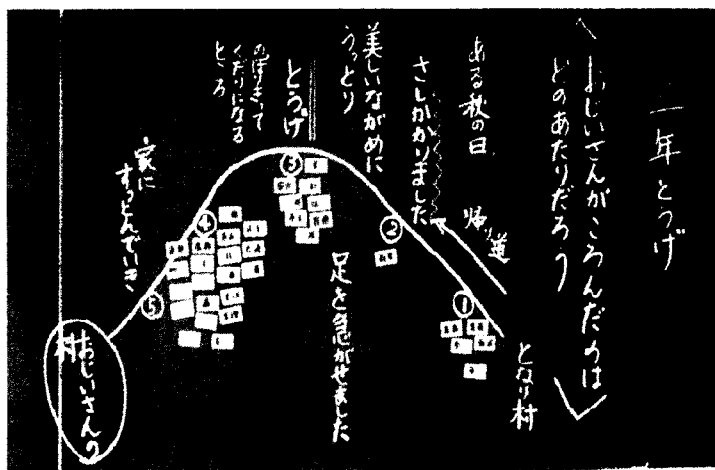
資料5 「わすれもの」の板書
自他の考えの立場を明確にする

自分の考えの立場を明確にした(条件B, 資料5)。帰る2, 帰らない30と人数に偏りが出たのだが、自分と同じ考えはだれだろう, 違う考えはだれだろうと黒板を興味深く見入っていた。はやく自分の考えを言いたい, 話を聞いてみたいという気持ちの盛り上がりを感じられた。その後, 自分がそう思った理由を出し合った。ネームを見ながら同じ考え, 違う考えのどちらか聞いてみたい人を選んで指名する相互指名ですすめた。2対30と第一次判断(条件A(2))に偏りがあったため, 反対の意見をきくのにはかぎりがあったが, 同じ考えの意見も興味深く聞くことができていた。次に, 出された意見を類型化して番号をうった。番号をうつことにより, 「帰るの○番の意見に賛成です。なぜなら…だからです」というように簡潔に自分の意見を述べることができた。また, どの考えについての発言をしているのか, 自分も聞いている子たちにもわかりやすくなる。そのため, 自分の意見と比べながら賛成や反対の意識をもって発言したり, 聞いたりしやすくなった。この集団思考活動の後, いちばんよいのはどんな方法か, 再び自分の考えを書き(条件A(2)), グループで話し合い(少人数の集団思考活動)を行った。そして最後に, 一人一人が再度考えをまとめた。第一次判断(条件A(2))に対して, 集団思考活動を経て, より深く意味づけのある考えになっていた。「ロンとわかれたくない」では1次判断が16対18, 「なくしたかぎ」では12対22, 「手作りケーキ」では17対17, 「わすれもの」では2対30と立場には数的な偏りがあったが, いずれも同じように集団思考活動を展開することができた。自分と反対意見の人が極端に少なくとも集団思考活動が成立するということは, 自他の考えの立場が明確という条件Bにおいて, 誰の考えかを明確にすると共に, 他の考えがあることを認識する

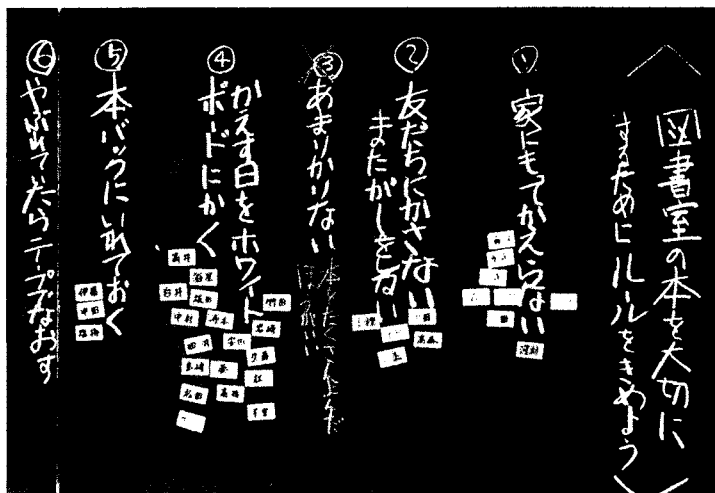
ことができることも重要なのであろう。モラルジレンマ資料を用いた道德の時間の授業の流れが, 他の場面での集団思考活動を取り入れる授業の流れの基盤になった。この流れを繰り返すうちに, 子どもも集団思考活動を取り入れて課題解決をめざす授業の流れに見通しを持てるようになった。

国語科の「三年とうげ」では, 「おじいさんがころんだのはどのあたりだろう」という課題に, 山の絵を書いて①～⑤の地点を選び, 言葉を根拠に理由づけをした。前述の道德の第1次判断のように二者択一ではなく, 五つから一つ選んで, その理由を書いた(条件A(2))。その後, 自分の考えの地点にネームプレートをはり, 一人一人の考えの立場を明確にしてから(条件B, 資料6), 集団思考活動に入った。「さしかかりました」「足をいそがせました」といった文末表現や, 「とうげ」の言葉の意味などにこだわり, 自分の考えと比べながらの集団思考活動になった。集団思考活動では消去法によって課題解決につなげ, ③がもっとも近いと結論づけていった。多くの考えに類別される課題に対しては, おのおのの立場を明確にする条件Bは, 全体の考えを整理しながら進められることから, 集団思考活動の成立には, より効果的であった。

学級会活動では, 前述したように, 図書



資料6 「三年とうげ」の板書



資料7 学級会で子どもが書いた板書

室の利用について話し合った。図書室を再び使わせてもらえるように学級独自のルールを決めることにした。図書の本はよごれたりいたんだりするので家に持って帰らない、借りた人は返す日を忘れないようにするためホワイトボードに記録しておく等、いくつか出された考えを議論することになった。そのとき司会は、どの考えに賛成なのかネームプレートを使って自分の考えを明確にしてから、賛成、反対意見を求めている(資料7)。学級会での話し合いでも子どもたちは条件をとりいれ、見通しをもった主体的な集団思考活動を行っていた。

このように、これらの条件がそろったとき、集団思考活動が活発化した。また、見通しをもつことにより、子どもが主体的に進めることもできるようになった。その一方で、これらの条件は互いに関連しているものであるため、どれかが欠けると成立しない場合もあった。たとえば、理科の「かげと太陽」の学習の場合である。かげの動きの観察結果をまとめたあと、「なぜかげは、このような動きをするのか」という課題についてすぐにグループで話し合った。ところが、どのグループも比較検討する集団思考活動にはならず、一部の子が説明しているのを他の子が聞いているのみという形態になっていた。この話し合いには条件A(2)がぬけたことにより、比較対象となる自分の考えがないため、自分の意見を話すこともできなかった子どもも多く集団思考活動にはならなかったと思われる。

4 今後に向けて

以上のように三つの条件を意識して実践を重ねてきた。どの条件も集団思考活動にはかせないものであった。学級の共感的関係(条件A(1))が構築されてくるにつれて、集団思考活動もスムーズに行われるようになってきた。共感的関係構築には、共通体験したことを学級通信でシェアリングをしたことも効果があった。友達の思いを互いに知り合い、理解し合うことによって、よりよい関係が築かれていった。しかしながら、条件A(1)の共感的人間関係はまだまだ完成されているわけではない。今後、さらにお互いを認め合える関係作りを進め、高めていきたい。集団に対しての手立てのみならず、一人一人にも関係を作ることができる能力がつくように手立てを講じていきたい。道徳や総合的学習の時間にじっくりと自分を見つめる時間を作ることも必要だろう。その力が一人一人についたとき、集団としての成長が感じられ、条件A(1)は成立条件に改めて列記する必要がなくなるだろう。

また、ここまで述べてきたような条件設定を基に進める集団思考活動が、どの課題に対しても必ずしも効果的とは限らない。見通しをもって子どもが主体的に活動できるようになってきた反面、多少形骸化してきている感じがある。この活動を、場や課題に応じて効果的に形を変えられるようにしていきたい。そして、集団思考活動が三力を育てるコミュニケーションに近づくよう模索していきたい。



資料8 学級通信「えいえいおー」